神前結婚式にみる「家」の変貌と個人の創出

石井研士

はじめに

近年、結婚式のあり方が急速に変化しつつある。結婚式といえば神前結婚式が当たり前まであった時代は終わり、リクルートの結婚情報誌『ゼクシィ』の調査によれば、首都圏では二割ほどであるという。仲人のいない結婚式が普通であって、同じ調査では、首都圏の結婚式で仲人を立てた式はわずかに八パーセントにすぎなかった。しかも、すでにこうした事実が神社界で驚きを持って迎えられることはないように思う。

結婚式をホテルや専門式場で行わず、しゃれたイタリアンやフレンチのレストランで友人に囲まれて式を行うことが流行っている。結婚式を扱った雑誌には、レストラン・ウェディングやハウス・ウェディングと呼ばれる特集が頻繁に登場している。こうした結婚式には、神職や牧師といった宗教者が司式することのないものも珍しくない。

そもそも結婚式が、家を離れて、外部の施設で行われるようになったこと自体がそう古いことではない。昭和三〇年代後半には、まだ、自宅で挙式する家庭が少なくはなかった。しかしながら、その後状況は一変する。群馬県の山村六合村ですら、昭和四〇年代の終わりには、村で結婚式を行うことをせず、山を一つ超えた草津のホテルで行う結婚式が当たり前になっていった。

こうした儀礼の変化の背後には、社会構造の変化が存在する。「家」を中核とした地域社会の儀礼であった結婚式から、家族や個を基盤とした儀礼へと変化させた力が、結婚式の形態を大きく変えることに働いたのである。

日本の長い婚姻史のなかで、結婚式に関してもっともエポックメイキングな出来事は、宗教者の関与する結婚式の誕生である。歴史学や民俗学の立場に立てば、鎌倉時代中

期を境にした妻問婚・婿入婚から嫁入婚への変化が大きな変化として言及される。妻問婚は夫が妻の家を訪問する形態の婚姻で、夫が妻の家に入る婿入りの儀礼によって開始される。夫と妻は昼間は自分の家で働き、夜になると夫が妻の元を訪ねるのである。生まれた子どもは妻方で育てられる。他方で嫁入婚とは、嫁入りによって始まる婚姻の形態で、嫁は生家を離れて以後は婿の家で子供を産み生活を営む形態である。柳田国男が「聟入考」で指摘しているように、社会形態として妻問婚と嫁入婚は大きく異なる婚姻の形態である。しかしながら、これらの形態は社会的形態の変化であって、意味自体の変化からすれば、宗教者の介在する結婚式の発生と普及という現代的問題もまた重要視されてしかるべきである。

日本の婚姻史において、宗教者が結婚式に介在することのなかった時間は長かった。神前結婚式は明治時代になって作られた儀礼であり、一般への普及は第二次大戦後のことである。神前結婚式の案出や普及に際しては、個々の神社や神職の果たした役割が少なくないが、近年の急激な減少を見ても、社会構造の変化や日本人の意識の変化の方が大きな影響力を持ったことはうたがいがない。結婚式は、挙式と披露宴という明確に分離された二つの部分から構成され、挙式は宗教者の司式によって執行される。また、基本的には、それぞれの部分の出席者は異なっている。

昭和四〇年代、五〇年代に一般化した神前結婚式は、平成になって急速に減少していく。八割を超えていた神前結婚式は、わずか一五年ほどの間に二割を切るまでになっている。他方でチャペルウェディングが急増し、現在は七割ほどになった。チャペルウェディングの増加は、その後に登場する宗教者が介在しない結婚式への一過程と考えることができる。

筆者は、平成一七年に『結婚式―幸せを創る儀式』（日本放送出版協会）を刊行した。結婚式という儀礼を分析することで、日本人の宗教性の変容を理解しようと試みた。あらためて、神社神道と社会変動の視点に立って、日本人の結婚式という儀礼の変化を考察してみたいと思う。

近代的結婚式の失敗

具体的な神前結婚式の創出の経緯に関して述べる前に、ひとつ重要な点について言及しておきたい。それは、宗教者を介在させることのない、近代的儀礼を謳った結婚式が人々に受け入れられなかった点についてである。今でこそ結婚式といえば、挙式と披露宴がセットになった儀礼で、挙式を司るのは宗教者である。しかしながら過去には、宗教者を介在させない、人の主導による挙式を普及させよう

とする人物や時勢が強く働いたことが二度あった。

幕末から明治時代に、多くの若者が藩費や国費あるいは私費によってイギリス、ドイツ、アメリカへ留学した。若くして西洋文明に触れた留学生たちは、自らのライフスタイルを欧化し、結婚のスタイルも旧弊にとらわれない新しい様式を実行して見せたのであった。近代的な結婚式は条約改正も含め日本の近代化に直結することがらと考えられた。結婚式に関して、新しい近代的な様式を提唱したのは、後に文部大臣となる森有礼である。森が提唱したのは、契約結婚式であった。

契約結婚式は、関係者の前で、両性の合意により結婚を宣言する結婚式であった。契約結婚の直接的な思想的背景をなしていたのは森有礼の『妻妾論』である。(1) 森は明治六年にアメリカから帰朝して明六社を興した。明六社の機関誌が『明六雑誌』で、福沢諭吉、中村正直、西周、津田真道など当時の名だたる啓蒙家や洋学者が集まり、明治時代の思想形成に大きな影響を及ぼした。

森が『妻妾論』で強調したのは西洋流の一夫一婦制である。人と人は結婚すると同時に、その間に権利・義務の関係を生じ、お互いに侵害することは許されない、と森は述べる。夫婦はお互いが助け合い支えあうのが道理であって、夫は妻に扶助を要求する権利を有し、また妻を扶養する義務を負うのである。同様に、妻は夫に対して扶養を要求する権利を有し、夫を扶助する義務を負うのである。そして、いやしくもこの道理にのっとって行われない婚姻は、人間の結婚とみなすことはできないのである。夫が妻に対して虐使をほしいままにし、離婚も一方的に行うことができる、妻の他に複数の妾を持つことが社会的慣習として行われていた当時の社会状況下ではきわめて進歩的な主張と映ったようだ。(2)

明治八年二月六日、森は新築したばかりの木挽町（現在の東銀座）の洋館で福沢諭吉を証人として契約結婚を行った。「婚式請柬」と表記した招待状を百名余りに発送し、新聞記者を招き入れたのであった。

しかしながら近代的を謳った契約結婚は、森の影響を受けた者によるわずか五例にとどまった。森の標榜した近代的な契約結婚は、当時の社会と人々に受け入れられなかったのである。洋館での洋式の結婚と契約という概念は、たとえ文明開化が謳われたとしても、受容するための社会的基盤を欠いていた。

宗教者が介在しない、なおかつ新しい結婚式がいま一度提唱されたことがある。それは第二次大戦後のことである。

戦時中に結婚することはなかなか困難なことであった。当時の政府は結婚を奨励したが、適齢期の男性が不足し、

不安定な政情の中で、結婚は控えられていくことになった。戦時中五〇～六〇万件で推移した結婚式は、その後一気に増加していく。昭和一五年に六六六・五七五件であった件数が、戦後の昭和二二年には九三四・一七〇件と一・四倍になる。結婚率も二桁台の一二・〇と最も高い数値を示した。戦争が終わり、しだいに平穏を取り戻しつつあった当時、多くの男女は結婚を望んだのだった。昭和二二年、婚姻率は戦後最も高くなり、昭和二二年から二四年頃に第一次ベビーブームが起こった。そしてこの時期生まれた子供たちは団塊の世代と呼ばれるようになり、その後神前結婚式は隆盛を迎えることになる。

こうして多くの日本人が結婚に対して積極的になっていったときに、結婚式に関して新しい強力な提言がなされた。「民主主義的な結婚式」である。戦後の民主主義の風潮に沿って、結婚式も民主主義的な様式で行おうという運動であった。結婚の急増を背景にして公共団体は、相次いで結婚式場を開設した。豊島区や台東区などに公営の結婚式場が設けられた。これらの式場は簡素をモットーにし、公営であるために、宗教色を持つことは禁じられていた。戸籍抄本と婚姻届を出して互いに署名し、一杯の杯を飲み終わるだけの式であった。昭和二五年くらいからブームは落ち着きを見せ始めるが、昭和三〇年代の前半までにぎわったようだ。(3)

このような第二次大戦後の民主化運動とあいまった人前結婚式、別名憲法結婚について、市川孝一は、この結婚は「「家」と「家」との結びつきを積極的に否定し、独立した個人としての一人の男と一人の女が公衆の前に夫婦であることを宣言するという、かなり思い入れの強い、いかにもこの時代の雰囲気を反映した「時代の産物」であった」と述べている。さらに市川は「本来「無宗教」の平均的大多数の日本人にとっては、この「人前結婚式」こそ宗教意識の実態に最もかなったものだと思われる」とさえ述べている。(4)

しかしながら、家から出た結婚式は、そのまま公共施設で行われる市民婚とでもいうべき非宗教的な結婚式へと向かわなかったのである。公共団体での無宗教式だけでなく、他の施設でも一般化することはなかった。明治初期に、近代的な様式として森有礼たちが実践してみせた契約結婚が普及しなかったのに続いて、戦後も同様にきわめて効率的で民主主義的なやり方で行われた結婚式は普及することがなかったのである。

なぜ神前結婚式は生まれたか

以上のようなことを念頭に置いて、あらためて神前結婚

式の創出について考えて見よう。

神前結婚式は、明治時代、つまり近代になってから創られた比較的新しい儀礼である。いわゆる神前結婚式がいつ始まったかについては、諸説見られる。もっとも一般に流布している説は、明治三四年の皇太子の神道式結婚式に影響を受けた人々が、明治三五年に日比谷大神宮（現在の東京大神宮）において挙式したのが初めての神前結婚式である、というものである。

いつ神前結婚式が始まったかについては、その源流を含めて、神道学者の平井直房が詳細な考察を行っているので、ここでは概説にとどめる。[5] 平井は、江戸時代になると、結婚は神の計らいであり恵みであるという信仰が芽生え、江戸中期には文献上に、婚儀の席に神が臨在するという意識が現れたと指摘している。また、明治六年に神宮教院から刊行された『五儀略式』が神職の司式による神前結婚式について著した最初のものではないかとも述べている。

先にも記したように、現在の神前結婚式が案出されたのは明治になってからである。当時は、他にも明治一九年の静岡における神前結婚式、篠田時化雄（後に日比谷大神宮の宮司）による明治一五年の自身の結婚式、一七年の義兄の結婚式などが知られている。また、出雲大社教や大成教といった教派神道系の教団が結婚式の教本を刊行したのも明治一〇年代から二〇年代にかけてのことである。さらには、この時期に、一部のクリスチャンの間でキリスト教式結婚式、そして仏前結婚式も始まっている。明治四四年に刊行された『新家庭』（一一月号）には、日比谷大神宮、出雲大社教と並んで、築地本願寺と増上寺においても荘厳な儀式が行われていると記されている。

有地亨によれば、明治二〇年代末から三〇年代は、婚姻の習俗が動揺し混沌としていた時代だったという。伝統的な婚姻の儀礼や習俗が崩れていく一方で、新しい婚姻秩序が形成されることなく混然としていた。[6] 有地が取りあげている具体的な事例は上層階級での畜妾の常習化と離婚率の高さである。離婚率は農村で高く、農村の民衆の中に結婚、離婚、再婚にこだわらない自由な考え方や早婚が広まった。他方で華族や旧士族といった上層階級においては家の体面、儒教的道徳の既成ゆえに低かった。伝統的な結婚式は煩雑である一方で、簡略すぎる結婚式は厳粛さを欠く、というのが当時の状況であった。

それゆえに近代になって作られた結婚式は、たんなる儀礼ではなく、結婚制度、夫婦のあり方を問うことと同義であった。しかしながら日本の近代化は、市民社会の成立を待って始まったわけではなく、近世を通して社会構造の基盤となった「家」制度は、いぜんとして色濃く日常生活に

根を下ろしていた。

神前結婚式の初期の普及と誕生に関しては、当時の神宮奉斎会を初めとする神道人の積極的な活動が大きな意味を持った。一連の模擬結婚式、結婚式の舞台となった日比谷大神宮は、明治一三年に東京における伊勢神宮の遥拝殿として創建された。正式名称は皇大神宮遙拝殿であるが、日比谷の地にあったために一般に日比谷大神宮と称せられるようになった。

日比谷大神宮は神宮奉斎会の本院であった。維新政府は、キリスト教の進出に対して警戒心を抱くとともに、天皇親政体制の意義を国民教化するために、次々に制度を設けては改編した。明治二年に神祇官が設けられ、宣教のための宣教使が設置された。教化は必ずしも順調に進まず、政府は明治五年に神祇省と宣教使を廃止して教部省を設置し教導職を設けた。宣教使が国学者や神道家中心であったのに対して、教導職は仏教勢力も加えられた。結果的に惟神之大道を国民に教化しようとする大教宣布運動は、仏教教団の反対により崩壊し、目的を果たせないまま終息することになった。

教導職による国民教化の実はほとんどなかったようだ。それでもこの制度によって神道界は布教という問題に正面から向かい合うことになった。(7)

さて神宮奉斎会であるが、明治五年に教部省が設けられた時に、伊勢神宮の職員は教導職兼務となり神宮司庁に神宮教院が設けられた。同年、伊勢神宮の少宮司であった浦田長民は神宮教会の開設を願い出て、各地に神風講社が設けられた。その後制度の改編とともに別派独立し、明治一五年神宮教となり、さらに明治三二年に民法施行による神宮崇敬団体として財団法人神宮奉斎会となったのである。

神宮奉斎会の目的は「神宮の尊厳を欽仰し、皇祖の懿訓、皇上の聖勅を奉載し、国典を攻究し、国体を講明し国礼修行、神宮大麻及暦頒布の事に従ふにあり」というものであった。(8) 模擬結婚式は、この国礼修行部付属の礼法講習会が第一回講習会として開催したものであった。目的はただ、結婚式という新しい儀礼を作り上げることではない。結婚式という儀礼を通して「神宮の尊厳を欽仰し、皇祖の懿訓、皇上の聖勅を奉載し、国典を攻究し、国体を講明」することが目的だったのである。

神道界には神道界の必然性があった。同時に社会は、とくに政府は近代国家としてふさわしい新しい儀礼を模索していたと考えていいだろう。神前結婚式は、日比谷大神宮での神前結婚式以来、しだいに行う者が増えていった。当時の新聞記事などから神前式を行った者を見ていくと、政府高官の子弟、陸海軍関係者、大学教授の子弟、財界関係

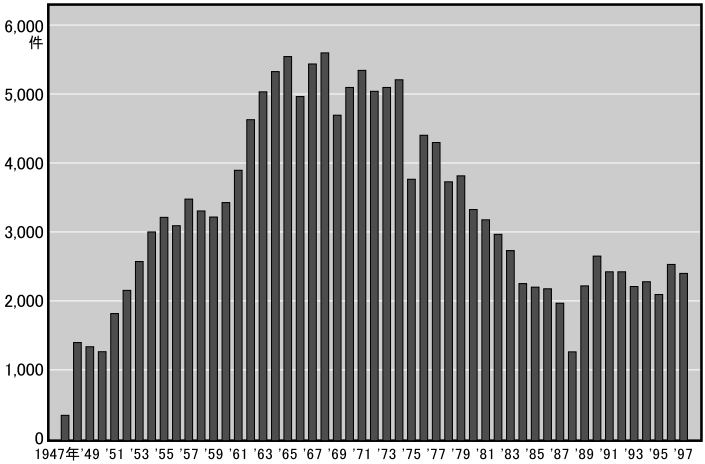

図１　明治記念館の結婚式数（『明治記念館五十年誌』）

者の多いことが分かる。もっとも、新聞記事になるのはこうした人々であるが、必ずしも神前式で行う慣例が存在していない時期に、記事になることを前提に神前式で行うことには、明らかに時代的な要請があったと考えていいし、進んでそうした風潮に添うことを目的としたものであろう。

森有礼の契約結婚自体は、近代的な様相をとっていたが、宗教者を介在させない点では、日本の伝統的な婚姻と同じである。長くイギリスとアメリカで生活し、キリスト教にも触れた森であったにもかかわらず、キリスト教の結婚式のように宗教者による司式を望まなかった。他方で、神職の司式する神前結婚式は創出され、しだいに人々の受け入れるところとなった。

儀礼自体について考えれば、神職であれ牧師であれ、宗教者による司式という形態は、神前式もキリスト教式も同様である。神職が関与する結婚式が行われていなかった点を考慮すると、儀礼を模索する段階で模倣したように映るかもしれない。しかしながらこれは、近代的な儀礼の構築を意識した結果と考えた方が適切である。

戦後の普及と社会構造の変化

戦後の神前結婚式の増加を、明治記念館での結婚式から明らかにしてみよう。ホテルでの結婚式はすでに明治時代から帝国ホテルで始まっていたが、本格的な普及は戦後になってからである。

明治記念館は昭和二二年一一月に明治神宮の結婚式場として公開された。戦後の宗教制度の変更に伴って、明治神

宮は昭和二一年五月に宗教法人となった。宗教法人としてスタートした明治神宮は「自立への道を探り、そのひとつとして神前結婚式場を開設する計画を立てた。…当時、東京には戦争のため結婚を遅らせていた人や、外地から引き揚げてきた人、田舎に疎開して帰ってきた人などがたくさんいて、結婚が差し迫った問題となっていた。家で式をあげようとしても、空襲で焼けてしまい、あるのはバラック建ての狭く粗末な家だけだった。そのような若い人々に結婚式の場を提供しようというのが明治神宮の計画であった。」[9] すでに、昭和二一年一月には明治神宮大前において二組の結婚式が執り行われていた。その後明治記念館は、戦後を代表する結婚式場となる。

なぜ神前結婚式は増加したのか

昭和二〇年代からしだいに増え始めた神前結婚式は昭和三〇年代後半に急増し、五〇年代には八割を超える人々が神前結婚式を行っていたことがわかっている。なぜ神前結婚式は多くの人々に迎え入れられたのだろうか。あるいは神社による教化が大きな成果を上げたのだろうか。

まず第一の理由は、新しい儀礼の必要性の増大である。結婚式が一部の上流にとどまらず、一般の日本人にまで浸透したのは、従来の結婚式にないものが求められていたからにほかならない。それは厳粛な儀礼への欲求である。

新生活運動によって提唱された結婚式の具体的な事例を見ていると、「儀式は厳粛に」といった表記がしばしばみられることに気づく。従来は、盃事と披露宴が一体となった形式であり、時間的な流れの中で、儀礼的な部分と直会の部分が一体化したものだった。挙式と披露宴の分離は、挙式をいっそう神聖なものとし、他方で披露宴をいっそう世俗的にした。結婚式が数日にわたって行われるものから、一日で終わる儀礼となったときに、さらに儀礼の意味は凝縮されなければならなくなった。日状態に区切りをつけて、新しい人生を始めるための出発になるような儀礼が求められていたのである。

しかし、その動機は必ずしも宗教的なものではない。少なくとも「宗教的儀礼」を求めて神前結婚式が普及していったわけではなさそうである。厳粛な儀礼で、しかも短時間で終了する儀礼であればよかったわけで、その儀礼を提供しえたのが、当時は神前式であったということになる。

神前式結婚式を行うことがけっして信仰の表明でないことは、神前式の普及が本物の神社からホテルや専門式場の一室に設けられた空間でもよかったことを考えても理解することができる。短時間で、しかも厳粛な儀式、披露宴との関係からもホテルや専門式場でという選択が働いたにち

がいない。

他方で、厳粛な領域を失った披露宴は、俗なる領域のうちの遊びの部分が拡大していくことになった。一時期、ドライアイスをふんだんに使った仕掛けが好まれたり、新郎新婦がゴンドラや白馬に乗って登場するといった派手な演出が顰蹙を買った時期があったが、これらは典型的な事例として考えることができる。

新しい儀礼の必要性には、もうひとつ理由が存在する。他の人生儀礼の希薄化、意味づけの後退である。出産や七五三、そして成人式が共同体の儀礼という意味を失っていったときに、自らが主役となる儀礼の意味は増すことになったのである。

神前結婚式普及の第二の理由は、簡便さである。農村など地方で行われていた数日間にわるような結婚式が、たった数時間で終わることには、主催者側と招待者側の双方に大きなメリットがあった。準備から始まって何事も自前で行わなければならなかった時代には、式場の設営、披露宴の料理、そして後片づけすべてが、家族や親戚、近隣の人々の手を煩わさなければ成り立たなかった。都会でも状況は変わらない。数日間に及ぶようなことはなかったとしても、挙式をする場所の設営、料理の手配、片づけはしなければならないことだった。

神前結婚式がホテルや専門式場内の神殿へ移ったのは、着付け、写真撮影、披露宴など、移動の煩雑さを避けるためである。帝国ホテル内に神前結婚式場を設けた支配人犬丸徹三の発想はまさしくそうしたニーズをつかむものであった。特別な衣装を着て、多くの親族を伴う結婚式は、移動には不向きな儀礼である。

神前式が普及した第三の理由は、「家」の残存である。神前結婚式が隆盛を極めたときの担い手が、団塊の世代を中核にした前後の若者である。彼らが体制や既成の価値観、とくに親のそれへのプロテストをモットーとしても、結婚という人生の大きな節目に親を無視することはできなかった。実際、結婚式の費用は親がかりであり、親の援助なくしては正式な結婚式は困難であった。「同棲」は後ろめたい隠されなければならない非公式な関係であった。現在よりも親戚との関係は濃かったが、それでも依存関係が薄れつつあった当時、親の面子、親戚との人間関係をいっきょに取り戻すことができたのが神前式結婚式であった。神前式結婚式は、この点では妥協の産物だったということができるが、それは多方面を丸く収めることのできる万能薬でもあった。彼らは会社の上司など、形式的な仲人を立てたが、すでに見合い結婚は少数派になり、お互いが恋愛感情を持って式に臨むようになっていった。

神前式から教会式へ

昭和四〇年代、五〇年代に八割を超えていた神前結婚式は、六〇年代になって減り始め、平成になって急速に減少した。八割ほどだった神前式と一割ほどだったチャペルウェイデングの交代が起こるのは一九九〇年代半ばである。

図2は、これまで行われてきた挙式形態の変化に関する調査結果を一枚のグラフに表示したものである。[10] 調査によって交代の時期は微妙に異なっている。BICブライダル調査では一九九四年から一九九五年の間でグラフは交差している。BICブライダル調査では、教会式の他に海外挙式が項目として設けられており、海外挙式がチャペルウェイデングであることを考慮して、海外挙式を教会式に加えると、一九九四年に交代したことになる。

同様に三和銀行調査では、一九九六年にほぼ同率となっている。全国結婚式場協会調査は、一九九四年に調査が終了しており、まだ神前結婚式とチャペルウェイデングの交代は起こっていない。調査が継続されていれば、交代はその後ということになる。また、ゼクシィ調査によれば、調査が開始された一九九四年の時点ですでにチャペルウェイデングが神前結婚式を上回っている。調査が行われていれば、一九九四年以前のどこかということになる。この調査では全国平均が示されておらず、首都圏のデータを利用した。それゆえにチャペルウェディングへの移行は、全国平均よりも早いことが予想される。

図3は筆者が行った調査の結果である。大学での講義の

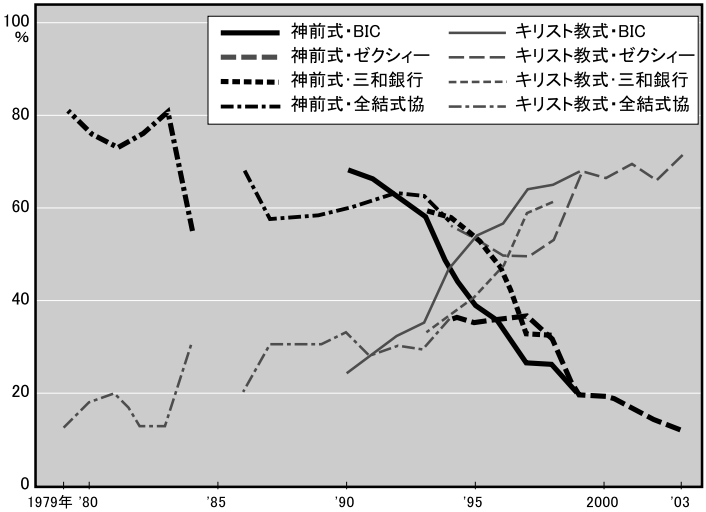

図２　戦後の神前式とキリスト教式の推移

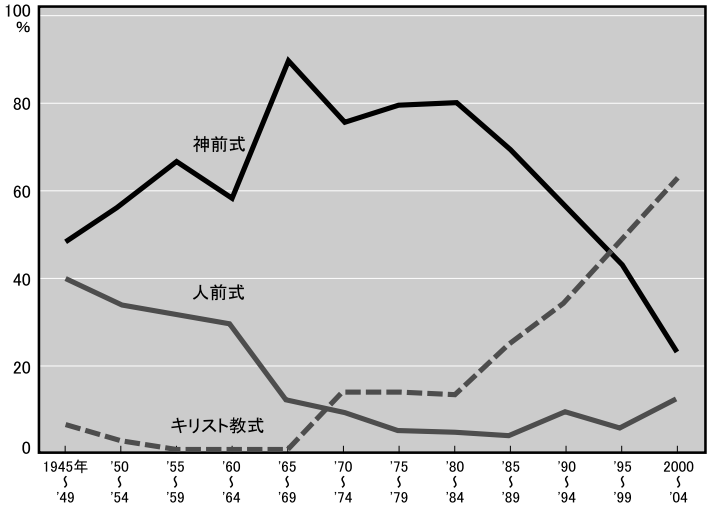

図３　戦後の結婚式の変化

受講生によって収集されたデータを挙式形式ごとに図示したものである。[11] 図２と同様に、ここでも一九九〇年代半ばの一九九四年に神前式とチャペル式が交差している。

調査対象、調査方法によって、結果に多少のずれは見られるが、一九九〇年代のどこかで、神前結婚式とチャペルウェイデングの交代が生じたと結論してまちがいない。

現状での挙式様式ごとの割合を確認しておくと、神前式が二割前後、チャペルウェイデングが七割前後、一割ほどが人前式・その他ということになる。仏前結婚式は数値となって現れるほど行われていないようだ。

結婚式に見る個性

実際に結婚をした当事者は、どのような理由から挙式様式を選択したのかを知るために、筆者が行ったアンケート調査の結果を引用することにしたい。

結果は図４のようになった。自由記入してもらったものを筆者が分類した。選択の多かった順に並べてあるが、神前式や教会式も分かるように図示してある。

昭和二〇年から現在まで、挙式の様式を選択した理由で圧倒的に多かったのは「一般的だったから」という理由であった。全データの二三パーセントがこの理由を選択している。ある意味では状況適応的で消極的な理由として受けとめられるが、他方では「人並み」という安堵感や満足感もあったのかもしれない。「一般的だったから」というカテゴリーには「当時は当たり前だった」「主流だった」「皆がそうだった」「慣例により」「無難だと思った」「当時は

それしかなかった」等の回答が含まれている。

挙式の様式別に見ると、神前式を選んだ者にこの回答が多い。教会式は人前式よりも少ないが、この場合の人前式は昭和二〇年代を中心に、自宅で行われていた挙式であり、

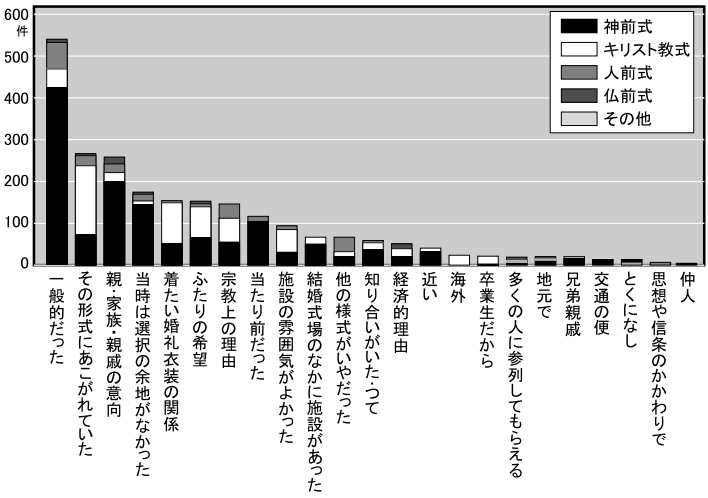

図４　宗教系統別の挙式形態選択理由

当然ながら「一般的だったから」ということになる。

次ぎに多かったのは「その形式にあこがれていた」と「親（家族・親族）の意向で」で、数の上ではほぼ同じになっている。

「その形式にあこがれていた」のカテゴリーには、「新婦がチャペルウェディングにあこがれていたから」や、「ジューンブライドが夢だった」「ロマンチックな感じがしたから」が含まれている。中には「愛の誓いをやってみたかったから」とか、「少女マンガの影響で」というものも見られた。このカテゴリーを選んだ回答者には、「一般的だったから」と異なって、教会式で挙式した回答者が多かった。神前式で挙式した回答者には、「厳粛な儀式をしたかったから」「ふだんから神社に親しみを感じていたから」といったものが見られた。

「親・家族・親族の意向」は、「親が決めた」「新郎側の実家の意向で」「家の伝統・しきたり」というもので、挙式する当人ではなく、「親」や「家」が全面に出されているものを分類した。

四番目に多かったのは「当時は他の選択の余地がなかった」という回答である。「式を挙げたホテルがそれだった」「ホテルには神前式しかなかったので」がもっぱらで、「一般的だったから」と同様、消極的な選択理由である。それ

でも挙式をやめることはなかった、という点に考慮すべき意味があると考えられる。

その次ぎに「着たい婚礼衣装の関係で」「二人の希望」「宗教上の理由で」がほぼ同じ数で並んでいる。

「着たい婚礼衣装の関係で」には、「ウェディングドレスを着るのが夢だった」の他に、「白無垢を着て挙式をあげたかったから」や「新郎が新婦に白無垢を着せたかったから」といったものがあった。ちなみに、衣装で取りあげられたのは「ウェディングドレス」か「白無垢」で、かつては代表的な婚礼衣装であった文金高島田は、ひとつも見られなかった。

教会式が選ばれる理由として、新婦がウェディングドレスを着たいからだという一般的な感想が述べられることがある。調査結果をそのまま受け取れば、こうした印象は誤っていたことになる。しかしながら、いぜんとしてウェディングドレスが重要な要素であることは、ブライダル雑誌を見ても一目瞭然である。雑誌に登場する花嫁の衣装は一〇〇パーセント近くがウェディングドレスである。白無垢姿の花嫁は、神社が施設として持つ会館での挙式にしか出てこないといっていい。女子大生の書く結婚式に関するレポートでも、ストレートに「ウェディングドレスを着たい」という表現がしばしば登場する。

それにもかかわらず、婚礼衣装が挙式の大きな選択理由になっていないのは、ウェディングドレスを着ることだけが目的ではないからである。ウェディングドレスは、彼らにとっての「結婚」を象徴するものなのであって、愛情や幸せをシンボライズするための重要な装置である。それゆえに「その形式にあこがれていた」や「施設の雰囲気がよかった」、あるいは「二人の希望」といった回答に含まれていると考えることもできるものである

「二人の希望」は、そのままの表記で「二人で決めた」「二人の希望で」という回答である。実際には、決めた理由、希望した理由を尋ねたかったが、調査方法の性格上やむをえなかった。

思いがけず「宗教上の理由で」とする回答が多かった。「宗教上の理由で」とする回答の他に、さまざまな回答が見られた。もっとも一般的なのは「クリスチャンだから」「創価学会の会員だから」「天理教だから」といった信仰を理由にしたものである。他にも「結婚相手が僧侶であるから」「仏教徒のため」や「相手が神職だったから」「神田明神の氏子だったから」も見られた。

「宗教上の理由で」とする回答で興味深いのは、挙式する当人ではなく、親や家がかかわるケースが少なくない点である。つまり、「家系が仏教」「本家のお寺で」「新郎の

家が参拝する神社であったから」「新婦の母親がカトリック」「実家がカトリック」「義兄が神職」という理由である。本人に挙式に対する強い希望が存在せず、あるいは関係者の意向を汲んだのものなのか、ここでは指摘だけにとどめておく。

この他の項目では「当たり前だった」「施設の雰囲気がよかった」「結婚式場の中に施設があったから」「他の様式がいやだった」が、やや目立つ程度である。

「当たり前だった」というカテゴリーは、先に説明した「一般的だったから」よりも積極的な回答を集めたものである。「日本人だから」「伝統的な形式でやりたかった」「古式ゆかしく」といった回答を集めた。回答者の大半は神前式で挙式を挙げている。

「結婚式場の中に施設があったから」は、「式場の勧め」によるものや「ホテルのパックで」「プランの中にあったから」という回答である。ホテルや式場のイニシアチブが強く感じられた回答を分類したが、先の「当時は選択の余地がなかった」とは微妙な差で、いっしょに分類してもいいかもしれない。

「他の様式がいやだった」というカテゴリーは解説が必要かもしれない。この選択肢を選ぶ者は人前式に多く、「特に信仰がなかったので」「教会式だとキリスト教の説教を受ける必要があり、それが面倒だったから」「仲人を立てなくなかったから」という拒否派と、「理想の結婚式にしたかったから」「何もとらわれず行いたかったから」という積極派が存在する。少なくとも、他の様式を考慮した上で挙式様式を決定した人たちである。

今回の調査では、他の調査で指摘される「交通の便」はわずかで、「近い」「地元で」を含めても少なかった。

選択理由の変化

次ぎに、挙式の選択理由を経年別に見ることにしよう。挙式を選択する理由はどのように変わったのだろうか。

とくに数値として高い項目の変化を示したものが図5である。なお、数値は五年ごとにまとめて示した。二三四〇件のデータであるが、戦後六〇年で割れば、各年の件数は四〇件ほどとなる。回答者に学生の親が多く、ある年代にデータが多いこともあり、五年間のデータを合計して安定した変化を読み取りたいと考えた。それでも図5を見ると分かるように、明確な理由がわからないままにポイントが上下している期間があり、今後のデータの充実が望まれるしだいである。

昭和三〇年代の前半まで、もっとも多い挙式形態は、人前式であった。この時期の人前式を選んだ理由を見ると、

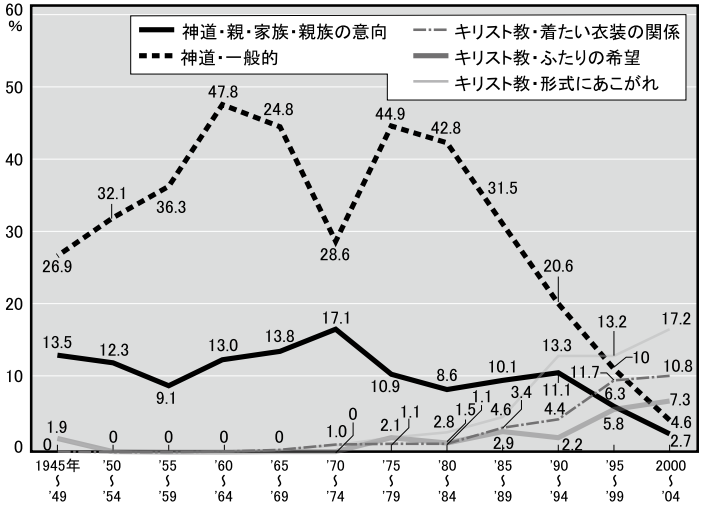

図５　挙式選択の理由一覧

圧倒的に「一般的であったから」となっている。昭和二五年から二九年にピークを迎え、その後は急速に減少していることがわかる。

神前式結婚式は戦後しだいに増加し、昭和四〇年代から五〇年代にピークを迎えるが、増加していった時期の主だった選択理由は「一般的だった」と「親・家族・親戚の意向」の二つである。挙式場所も自宅を出て、神社の会館や料亭などで行われるようになっていく。「一般的だった」とほぼ同じ内容を意味するものとして「当たり前だった」「選択の余地なし」を加えると、この傾向はさらに明確となる。

どうして「一般的だった」と「親・家族・親戚の意向」から神前式挙式が行われたのだろうか。この二つの理由からは、必然的に、披露宴の前にわざわざ挙式を行う理由が出てくるようには思えない。このふたつの理由は、ひとつのことを別の表現で表しているに違いない。つまり「世間体」である。挙式する当人の背後に親や親族がおり、挙式と披露宴をわけて結婚式を行うことが望ましくなると、よりいっそう神前結婚式へと傾斜していったにちがいない。

一九八〇年代の終わり頃から、神前式が「一般的であったから」が急速に減少していく。一九九〇年代に入って、「親・家族・親戚の意向」によって行われていた神前式が、同様に減少していく。代わりに教会での「その形式にあこがれていた」が一九七〇年代の終わり頃からじりじりと増加し、一九八〇年代後半に急増して、現在はもっとも高い割合になっている。割合は低くなるが、教会「着たい衣装

の関係で」、教会「二人の希望で」がほぼ同じ時期から増加していく。

一九四〇年代後半から一九五〇年代後半に挙式を決定していた「親・家族」はその後減少し、一割を切るまでになっている。同様に「新郎」も減少した。代わって増加したのは「二人で」であり、近年は「新婦」が増えている。挙式形態の選択理由で多かった「施設の雰囲気が良かったから」「着たい衣装の関係で」から考えても、「二人」をリードしているのは新婦であるだろう。

神前式から教会式への移行は、価値観もしくは人間関係に関する二組の移行の現れである。ひとつは、「親・家族・親戚の意向」から「二人の希望」への移行である。いまひとつは、「一般的・無難・人並み」から個性への移行である。

昭和二八年から五年ごとに、日本人の日常的な場面における態度や心情について統計調査を行い、日本人のものの見方や考え方の特徴を計量的に明らかにしてきた統計数理研究所が、ほぼ半世紀にわたる「日本人の国民性調査」に関する報告書を作成している。[12] 同報告書によれば、戦後日本人の意識は大きく変化したという。私生活を優先する価値観が一貫して顕在化し、「一番大切なのは家族」とする意見が最大級の増加を示したという。そして、晩婚化が進み、生涯結婚しない人々が増加している。

「家」や親族、会社での人間関係を意識した従来の結婚式は、すっかり様変わりしつつある。戦後の「家」や地域共同体の崩壊は、結婚式の場所、結婚式に集まる人々の範囲や人数、挙式の様式の決定者をはじめ、いたるところで確認することができる。仲人の急速や減少や、海外挙式の増加は、こうした変容の象徴的な現象である。

結婚式に見る個性の追求

結婚式における個性の追求は、挙式よりも披露宴に関して早く始まった。披露宴はもともと演出のしやすく、そうした点では個性を発揮しやすかったのではないか。

神前結婚式から教会式への移行は、個性の追求に対応するものでもあった。神前式の挙式では、ホテルや専門式場によって挙式場の大きさこそちがっても、神殿とその雰囲気は共通するものを持っている。神道式である限りは神殿の形式はおおよそ決まっており、大きな逸脱には違和感を感じるだろう。長い伝統の中で形成されてきた、誰が見ても神道の形式と分かるやりかたにならざるをえない。

他方で教会式の多様さは、ブライダル雑誌をみれば一目瞭然である。伝統的な様式の教会からモダンな教会まで迷えるほどの多様さである。全面がガラス張りのチャペル、見渡す限りオーシャンビューのチャペル、スカイガー

デンチャペルで青空の下の挙式など、なぜこうした多様性が許されるかといえば、そうした施設が教会ではなくチャペルであるためである。十字架とヴァージンロードと、牧師らしい人と、そして教会らしい雰囲気があれば十分である。日本人が、どこまで「教会らしさ」を理解しているかは、かなりあやしい。極端な言い方をすれば、すてきな洋館もしくは洋室であればオーケーということではないだろうか。

もちろん、こうして発揮される個性が、ブライダル業界の用意したパックの一部であったり、ブライダル雑誌を初めとしたメディアによる情報の影響によるところがあるとしても、少なくとも当事者である二人は、とくに花嫁は、多様な選択肢の中から自らの好みに従って、自分たちの幸せを演出しようとするのである。

減少する神前式結婚式であるが、一部の神社やホテル・専門式場で、増加の話を聞くことがある。神社での神前式の増加は本物志向だといわれる。つまり、ホテルや専門式場に設置された施設ではなく、本物の神社の神殿で挙式したいと希望するカップルが増えたというのである。筆者が大学生を相手に行った簡単なアンケートでも、本物志向の傾向が現れている。将来結婚式を挙げる際には、日本人らしさ、荘厳さゆえに神前結婚式を選びたいという回答が少なくなかった。日本人なら神前式、という回答はあまりに単純なステレオタイプかもしれないが、志向性は明白である。その志向性を表現するためのもっとも適切なスタイルは、本物の神社での挙式である。価値観の多様化の中で、一部ではあるとしても、こうした志向性を持つ者は必ず存在する。

他方でホテルや専門式場での神前式の増加は、異なった理由からのようである。文金高島田にすることなく、茶髪の髪のまま着物を着て挙式するやり方を、新和風などの名称で売り出し、関心を集めるホテルもある。

戦後の神前結婚式の急激な増加と減少は、総体的に見たときに、神社神道からの働きかけではなく、挙式する側のニーズによるものであった。そうした状況下において、そして、神社界自体がホテルや専門式場へと進出していく過程で、神前結婚式は短時間の間に押し込められた儀礼へと変化したのではなかったか。現在の神前結婚式の減少は、ホテルや専門式場で顕著に生じている現象である。神前結婚式の減少は、日本人にとって、そして神社界にとって、神前結婚式がどのようなものであるべきなのかを再考するよい機会なのではないだろうか。

注

（1）『妻妾論』は『明六雑誌』の八号（明治七年五月）から

二七号（八年二月）まで五回にわたって掲載された。

（2）美出寿美子「森有礼『妻妾論』の歴史的思想的背景」『日本歴史』第三〇二号、昭和四八年。野崎衣枝「森有礼の家族観―「妻妾論」を中心として」福島正夫編『家族政策と法7　近代日本の家族観』東京大学出版会、昭和五一年。ひろたまさき「文明開化と女性解放論」『日本女性史第四巻　近代』東京大学出版会、昭和五七年。

（3）朝日新聞昭和三〇年一〇月二日。朝日新聞昭和三三年四月五日、東京都結婚相談所編『東京都結婚相談所50年のあゆみ』昭和六〇年。

（4）市川孝一「結婚式の文化的変遷」日本家族心理学会編『結婚の家族心理学』金子書房、平成七年。

（5）「神前結婚の源流」『神道と神道教化』平井直房教授古稀祝賀会、平成五年、「神前結婚の歴史と課題」『明治聖徳記念学会紀要』復刊第三十号、平成一二年。

（6）有地亨『近代日本の家族観』弘文堂、昭和五二年。

（7）阪本是丸「大教宣布」「教導職は国民を教化できたか」『神道事典』弘文堂、平成六年。

（8）『東京大神宮沿革史』昭和三五年。

（9）『明治記念館五十年誌』編纂委員会編『明治記念館五十年誌』平成一〇年、一〇～一一頁。

（10）個々の調査に関しては石井研士『結婚式』（日本放送出版会、平成一七年）参照。

（11）アンケートの内容は、結婚した年、挙式の様式、挙式様式を選んだ理由（自由記入）、結婚式の会場、その選択理由が主な項目で、私が質問の仕方や内容に関してレクチャーをしてから、両親など周囲の人を中心に事例を集めてもらった。平成一五年と平成一六年の二年度で二三四〇件が集まった。

（12）統計数理研究所国民性調査委員会『統計的日本人研究の半世紀』統計数理研究所、平成一二年。

（國學院大學教授）